

# 蓬萊町だより

第五十二号  
平成十年十二月二十五日  
発行 蓬萊町会  
編集 蓮花

蓬萊町界限（その四十六）  
さかんだった「江戸風」

林 順信

◆「一銭風」でお正月の用意

地球温暖化とやらで、昨今は十月になっても夏が終わらない暑い日もある。十月十九日と二十日の「べったら市」など、昔はコートのを立てて行ったのに、今年の「べったら市」ときたら汗ばむ陽気だった。十一月十日と二十二日のお西様はどうだろうか。

戦前は十一月ともなると朝晩はもとより、日中でも寒風が吹くことがあった。蓬萊町で育った少年どもは、この頃から風あげに熱をあげ始めるのだった。蓬萊町の駄菓子屋は現在の郁文館への東西の通り、小川さんの真向かいにあった前田のおばあちゃんの店で、私より四、五歳年上のお姉さんもいた。

晩秋ともなると、駄菓子屋の軒先に「一銭風」が何枚も束になって、寒風にゆらいでいた。「一銭風」というのは、値段が一銭だったからの名前で、現在の風愛好家（子

供ではなく大人の方が圧倒的に多い）の言葉では「コマ風」という。横に長い四角の中央の上下に三角にとんがった部分があるので、コマの形に似ているからだ。

「一銭風」は決して高級ではなく、西洋半紙に近代印刷だったから、風に当たると、ペラペラ安っぽい音がした。骨は中央に一本、左右に二本だけで、糸目は三本という簡単な出来だった。絵柄は赤い龍字か、当たり矢、ポパイなどのきわものもあった。

「一銭風」をあげるのは細い糸で、余り重い糸だと、風が糸に負けてしまつてあがらない。真中の骨に細長い紙テープを尾っぽとして貼つてあげている子もいたが、名人ともなると尾っぽなしであげられるほど、糸目の調節がうまかった。

あげ場としては郁文館中学の校庭が最もよい場所だったが、「一銭風」くらいなら、自分の家の物干しからあげたり、屋根の上からあげた。

こうして晩秋から風あげのトレーニングをしながらお正月の風あげシーズンに向けて調整をしたものだった。

◆変わった形の風

十二月に入ると、北風がようしゃなく吹きつけて、蓬萊町の横丁の家々に飾られた松や竹をガサガサと音をたてて通りすぎて行つた。

蓬萊町の郁文館学園から本郷通りへぬける道にある季節料理「あかぎ」は元は「川

越屋」という菓子屋でその並びにあった高岡大上店現在は「向丘フラット」と、本郷追分町のおでん屋「吞菰」の並びにあった大久保荒物店では、「一銭風」ではない本格的な「江戸風」がたくさん並べて売られていた。

「江戸風」という言葉も昔は使われてはいなかった。戦後になって我々風好きの仲間たちが使い始めたもので、昔は風といえは「江戸風」にきまつていたからだ。

東京の風は、市内にあった風屋には風絵を描き、骨をはって風として仕立てていた店と、風を卸売りする問屋とがあった。蓬萊町や追分町の風屋は、年の暮れにだけ風を売る小売り屋だった。戦前に東部でできた問屋は、日本橋の麻善、岡田、赤坂の松本、水道町の林三兄弟、浅草吉野町の風清、下谷稲荷町の橋本などがあつた。風屋の看板はタコの風をぶらさげていて、口がとんがっていた。赤坂の松本は「忠さん」といつて、「ちゅうちゅうタコかいな」の言葉はここから来ているとか。

「江戸風」には、「江戸奴」という奴風がある。奴風をお侍の屋根の上まであげて「どうだい、おいらの奴風を下から見上げてみる」なんて日頃のうきを奴風にかこつけて晴らしたものだ。奴風は奴さんの形で黒い髭があり、左右の袖には小さな風穴があつて、あげるとき、その穴から風がに

げるようになっていた。

変形ものとしては、「鳶風」と「蟬風」とがあった。鳶風は空高く飛んでいる鳶の形をなぞらえたもので、黒地に朱色で羽毛を描いてあった。左右の翼は横長に広く、特徴はくちばしにあった。鳶のくちばしが立体的に三角にとんがって居り、その骨組は複雑で、裏から見ると驚くほど精緻な手仕事だった。現在はこれを作っている人はいなくて、風好き仲間が数個復元しているにすぎない。鳶風は四谷で始めて作られたといい、「四谷鳶」ともいわれていた。鳶風も左右に風穴がついていた。

「蟬風」は鳶風と形は似ていて左右に長く羽根が伸びていて、やはり風穴があった。「蟬風」はなぜか左右の羽根は赤く塗られていて、胴体のみどりや黄色で彩られていた。

「鳶風」も「蟬風」も形はおもしろいが、あげるのは割合むずかしく、すぐペコンとお辞儀をするし、スピード感に乏しく、余り高くはあげられなかった。

#### ◆姿はほっそり柳腰

「江戸風」といえば、なんといっても角風で、「江戸角」と呼ばれているくらい、絵柄が美しく、また縦長で、粋な風である。「錦風」などという人もいくらかい色彩が美しいし、手が込んでいる。

「江戸風」の紙は原則として西ノ内紙を使って、手描きによって、字風、武者絵、芝居絵、

縁起ものなど絵柄も豊富だった。西ノ内紙は茨城県の水郡線にある山方宿で拵えている和紙で、四七センチ×三〇センチほどで、白くて風絵が美しく描かれ、厚さとか腰もあってもっぱら風屋で使われていた。「江戸風」の大きさは、西ノ内紙を単位としていて、西二枚、西三枚半、西四枚半、西六枚ときて、西八枚、十枚となると畳一枚と同じ大きさまであり、それ以上となると注文立てで畳三畳敷きとかもって大きなものもあった。

字風としては、龍、魚、錦、嵐、雨かむりの鶴、纏、壽など画数の多い字とおめでたい字が使われている。「江戸風」の字は籠字（かごじ）といって、近くでは判読しにくいのが、離れてみると読めるという特色がある。

武者絵は男の子が健やかに強く育ってほしいということ、源義家、義経、太閤、加藤清正、梶原景季、牛若丸、渡辺綱、宇治川合戦、那須与一、などに人気がある。

芝居絵としては、勧進帳、助六、一ノ谷、鏡獅子、道成寺、児雷也などなど、縁起ものは、旭浪、浪鶴、浪鬼、だるま、般若、登龍、雲龍、三番叟などがある。角風の値段は高く、西二枚で二十銭、一枚半だと絵柄によって一枚八十銭から一円二十銭もした。子供が買うのはたいへんなことだった。

「江戸風」は、黄金分割というよりも細長く、丁度日本の紙幣と、アメリカのドル紙幣とのちがいと似て、プロポーシヨンが、ナロウタイプなので、姿はほっそり柳腰という美的感覚なのである。

この角風の上には、おいらんのかんざしよろしく、うなりを左右に張り出しにのせて、あがったときの「ぶーん、ぶーん」という音を楽しんだ。

その糸目はあくまでも長く、しかも出来るだけ多く何本もつけてあげると、バランスもとりに易く、尾っぽなしでも平気であげられる。

太陽に輝いた糸目が白く光り輝いて、抜けるような青空にくっきりと映え、これぞ「江戸風」の粋なところで北風に吹かれて青空を見上げること五、六時間でも飽きることはなかった。

「たごつくし」江戸期の風絵のお手本





**町会活動の概要**

平成十年七月初旬から平成十年十二月下旬

**総務部**

7/6 つつじ祭り総会 於 根津神社社務所

三宅町会長・小川副会長・川西婦人

- 7/8 部長 出席
- 7/8 区報配布
- 7/17 根津神社総会 根津神社社務所
- 7/22 三宅町会長・小川副会長 出席
- 7/22 区報配布
- 8/5 区報配布
- 9/8 区報配布
- 9/24 区報配布
- 10/8 区報配布

**防火防災部**

- 8/14 文京区より大型消火器設置申し込み  
大畑防災部長より
- 9/1 文京区総合防災訓練（東大グラウンド）  
（参加 町会長以下6名  
婦人部 7名  
有志 4名）

**交通部**

- 9/4 交通安全協会支部長会議  
石川交通部長出席
- 9/21 秋の交通安全運動始まる（9月30日  
まで）石川交通部長

**文化部**

- 7/6 向丘地区青少年対策委員会  
中島交通副部長・倉田出席

**婦人部**

- 7/1 定例会 於 常盤寺
- 7/7 向丘地区町会連合会 婦人部施設見学  
東京ガス（株）袖ヶ浦工場 4名参加  
資源回収
- 7/16 資源回収
- 8/25 定例会 祭礼行動予定について説明

9/7 大畑祭礼実行委員長より 敬老てんぶら手伝い 於 海蔵寺

9/9 秋の交通安全週間・駒込母の会支部 長会議 於 駒込警察署 部長出席 敬老のお祝い品をお届けする

9/10 敬老者 28名 日赤奉仕活動 くすの木の家 洗濯物たたみ 3名参加

9/14 お祭りの婦人部の行動予定について 打ち合わせ会議 於 常端寺

9/17 資源回収 秋の交通安全街頭指導 於 金子様前 赤い羽根共同募金始まる

9/21 285件 ¥205,400 ご協力ありがとうございました

10/15 資源回収 全国地域安全運動 青空防犯教室 於 富士神社境内

10/20 日赤献血奉仕活動 於 本郷郵便局 3名参加

10/28 定例部会 於 常端寺

**防犯部**

7/27 防犯連絡所責任者研修会 昭和小学校 三宅町会長・小川副会長・坂本防犯部長出席

9/30 防犯協会全体役員会議 駒込警察講堂

平成10年全国地域安全運動の実施について三宅町会長・坂本防犯部長出席

10/11 全国地域安全運動始まる 20日まで 坂本防犯部長

13日、20日町内防犯パトロール実施

**訃報**

当町会の方本年6月上旬から本年10月下旬までにご逝去なされた方のお名前は左記の通りでございます。謹んで哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈りいたします。

記

7/21 田沼弘市殿 67歳  
10/1 國井 浩殿 76歳

**蓬萊句壇**

長月を去る者疎き椅子に凭る 古川沛雨亭

子守柿石州和紙の紙細工 古川婦蝶

長月や寡言の客を持て余す 池田連木

亡父を詠む句に涙して秋の夜 青木沛寿

稲架日和老農一つ大あくび 小野向雪

名月やかくれし雲のうす明り 岡田栄子

長寿食妻のすゝめる新豆腐 金子郷南

落栗の殻ばかりなり風土記山 城山恵美子

吾亦紅かつての嘘がばれそうに 津久井たかを

新豆腐良き妻にして薄化粧 彦坂つぐを

病む夫に今見し話よるの秋 広沢しほり

月夜野や野仏かこむ曼珠沙華 福山七重

木犀の香に誘はれし庭掃除 船橋信子

花一輪心に挿して寒露かな 森ゆかり

長月や病臥の五体もてあます 横尾三風

編集後記

平成十年（一九九八年）もいよいよ押し迫りました。来年は二十世紀最後の年です。色々な意味で波乱の多い年となりそうです。が、粘りと英知を振り絞って二十一世紀への道を切り開いて行きましょう。この冬は寒さもひとしほとの予報も出ております。お互いに健康に留意して良き年をお迎え下さい。

編集委員

三宅英三 竹中俊之 常岡 裕

倉田幸一 池田 暉